

学びを大切にしたい楽しい体育の学習

～運動がもつ楽しさを味わおう～

則藤 一起

子ども一人一人が仲間と共に、夢中になって運動を楽しむことが体育の学習で大切だと考えている。しかし、子どもたちの運動に対する思いや技能などは様々である。そこで、子どもたちが「今もっている力で楽しむ」ことから始め、話し合い、伝え合うことを通して「高まった力で工夫して楽しむ」姿に発展していけるように、指導者は見通しをもって単元を計画しなければならない。重要なことは、運動への出合わせ方や子ども同士でかわらせるための手立て、技能的な支援の仕方を工夫することである。このことにより、運動に意欲的に親しみ、仲間とかわり合いながら運動のもつ楽しさを味わう子どもになっていくと考えている。

キーワード：楽しい体育、かわり合い、3つの対話、ソフトバレーボール、タグラグビー

1. 今もっている力で楽しむ

体育科学習では、今ある運動をそのまま楽しむのではなく、運動の特性をそこなわないようにして、自分たちの興味や関心、技能などに合った運動になるように考え、変えていくことが、その運動をより楽しむことにつながると考える。

学級の子どもたちを見ると、運動が得意な子もいれば、苦手な子もいる。また、これまでの体育科学習で様々な運動を一通り経験してきているので、それぞれについて得手不得手のどちらかを感じている子どもがほとんどである。このようにともに学ぶ仲間の力はさまざまであるので、単元を通して一人一人のもっている力の違いを意識しながら、運動の楽しさにふれる喜びを味わう、これが「今もっている力で楽しむ」という意味と捉え、研究を進めた。

「今もっている力で楽しむ」ことから、「高まった力で工夫して楽しむ」姿に発展していくためには、対話を充実させながら学習を進めていく必要があると考え、以下の表にあらわした3つの対話によって、仲間とかわり合い、運動の楽しさを味わわせられるような授業展開の在り方を探った。

自己との対話	個人学習カードにおけるふり返り
他者との対話	ルールや場の工夫についての話し合い チームの時間における教え合い・話し合い（作戦カード） チーム・個人学習カードにおける MSP やステキだった友だち
対象との対話	チームの時間における動きの確認や作戦（作戦カード） 個人学習カードにおけるふり返り

*MSP (most ステキ player)

2. 研究方法

2. 1. 運動への出合わせ方

各運動に出合わせる前に、その運動に対しての思いを知るためアンケートをとった。高学年という年齢を考えたとき、今ある運動をそのまま子どもたちに学習させようとする、運動技能の個人差や苦手意識というものが一番考えさせられる点である。6年生なので技能の個人差はもちろん大きくあり、苦手意識は今までの経験から「跳び箱は跳べないからおもしろくない」「ボール運動は、ボールが回ってこないから楽しくない」などという思いがあると思われる。アンケートをとることで、その運動の何をおもしろい、おもしろそうだと感じているのか、反対に何を苦手と感じているのかを知り導入方法や指導に役立てた。また、技能の個人差を吸収できるように、単元を計画するときにはルールや場の工夫をまず考え、どの子にも“やってみよう”と思わせることができるようにした。

2. 2. 子ども同士でかわらせるための手立て

学習カードを効果的に使うことで、子ども同士のかかわりを増やそうと考えた。毎回ステキだった友だちやMSPを書くことで、マナー面だけでなく、技能面でも見る視点を与えた。また「チームの時間」の使い方が充実しやすいよう、ふり返る内容をチームカードに書き、話し合いを進めやすくした。

2. 3. 技能的な支援の仕方

2. 2. で述べたようにMSPの友だちの動きからコツを見つけさせるようにし、より上手いく方法を自分たちで考えさせた。一方、体の使い方やコートでの動き方というのは、客観的に見る方が分かりやすいと考えたので、ビデオに撮って見せるようにした。

3. 授業の実際

3. 1. 「ソフトバレーボール」の実践より

	はい		どちらか という はい		どちらか とうと いいえ		いいえ	
	男	女	男	女	男	女	男	女
	体育は好きですか	11	11	3	0	0	4	0
ボール運動好きですか	12	7	1	5	1	2	0	1
			簡単・ 簡単そう		ふつう		難しい・ 難しそう	
	男	女	男	女	男	女	男	女
バレーボールをどう思いますか	2	1	6	7	6	7	6	7
ソフトバレーボールについて								
<ul style="list-style-type: none"> ・チームでの協力は必要で、むずかしそう ・ボールを落とさずつなぐのがおもしろそう ・サーブが苦手です ・アタックを決めたい アタックが楽しそう ・ちょっと高めネットをこえるようにする ・打つときに手が痛くなる ・ビーチバレーだったら、とびこめるから楽しい 								

表1 初めのアンケート

浮いているボールを止めずに浮かし続けるということは、普段あまり経験することのない動作であるためボールを操作する技能の個人差が大きいと考えた。アンケート結果からもバレーボールに対して「ふつう」「難しそう」と思う子どもがほとんどであった。そこで、ボールは30g、50gなどの軽いものを用いるようにすることで技能の個人差を軽減し、簡単にボールを操作できるようにした。ラリーが続くようになれば、100gのボールを選ぶなど、子どもたちの技能レベルに応じてボールを選ばせるようにすることで、より楽しい6Aバレーになるよう計画した。



図1 左から30g、50g、

100gのソフトバレーボール（大きさはどれも同じ）

○学習のねらい

自分たちでルールや用具、場の工夫などをしたり、パスやレシーブなどのボールの扱い方のコツを見つけたりして、自分たちに合った6Aバレーをつくって楽しむ。

○学習の道筋

- ・ねらい1(4時間)ルールやチームのメンバーに慣れながら、今もっている力でゲームを楽しむ。
- ・ねらい2(4時間)作戦を工夫し、対戦したいチームに挑戦してゲームを楽しむ。

○授業の様子

まず、ボールを一人にひとつ与えた。思いっきりサーブを打つ子、ボールを落とさずに何回もつく子、友

だちとパスをし合う子とそれぞれがボールに慣れ親しんだ。この時のボールは30gと50gであった。ゲームでは、ボール運動が苦手な子もボールに触りにくい姿があった。ルールがややこしい時は、話し合ったり、ジャンケンをしたりしながらゲームを楽しんでいた。ルール面では、ネットの高さ、サーブの順番、ボールをつく回数などを話し合い、改善していった。

第2時以降、チームの時間ではチーム内でパスを回す姿が多く見られた。ゲームでは、サーブを女の子のほとんどが真ん中から打って、決まった時にはうれしそうであった。しかしゲームが始まると、必死になるあまり得意な子だけが触ってしまうチームも多かった。そこで学習カードから上手くいっているチームの感想・意見をみんなに知らせ、チームでつなぐことを意識させるようにした。時間を重ねるにつれ、「みんなでつなぐのが6Aバレーだ」という思いが浸透していった。それは学習カードの「みんなでボールを回せた」「ボールに触る回数が多くなった」というふり返りを書いている子が多いことからわかる。リーダーも勝つためだけではなく、自分のチームのメンバー全員が楽しむためにはどうすればいいのかという課題をもって、めあてをたてていた。また、毎時間MSPをチームでも個人でも書かせることでマナー面や技能面での視点も高まり、チームで楽しむことにつながった。



図2 ゲームの様子

Aくんが、私がしんぱんをしている時、「いいよ、いいよ」や「いけるよ」と声をかけていたのでよかったです。
Bくんが、パスを回すために、名前を呼んでパスを回していたので、私のチームでもやっついこうと思いました。
Cさんが、ボールを大事に回して、けっこうまわったのでよかったです。
Dくんが、ちがうチームなのに、チームの時間の練習の時にサーブをしてくれたのでレシーブの練習ができた。

表2 ソフトバレーボールのMSPの内容

3. 2. 「タグラグビー」の実践より

	はい		どちらか という はい		どちらか とうと いいえ		いいえ	
	男	女	男	女	男	女	男	女
	体育は好きですか	10	6	4	4	0	3	0
ボール運動好きですか	11	5	2	5	1	3	0	1

	はい	いいえ
タグラグビーをしたことがありますか	1	27
タグラグビーについて		
<ul style="list-style-type: none"> ・女子でもできそうだったのでうれしい ・ラグビーのこわいイメージがなくなった ・ぶつからないので、安心してできそう ・タグをたくさん取ってみたい ・トライを決めたい ・ルールは少し分かりにくい ・いっぱい走るので楽しそう ・パスもしたい ・チームのみんなと協力できるスポーツ 		

表3 初めのアンケート

タグラグビーについて聞くと、ほとんどの子どもが知らなかった。そこでDVDを見せ、タグラグビーとはどのようなものかを知らせてからアンケートをとった。その結果、上記のようにほとんどの子どもが好意的な感想を書いていた。コートの大さはどの子も走り回れるよう広くした。また、初発の単元であることからルールを出来るだけ簡素化し、すぐにタグラグビーに慣れるようにした。

○学習のねらい

自分のチームの特長を知り、様々な作戦を考えることで、攻め方や守り方を工夫してゲームを楽しむ。

○学習の道筋

- ・ねらい1(3時間)ルールに慣れながら、自分のチームの特長を見つけ、ゲームを楽しむ。
- ・ねらい2(4時間)自分のチームの特長を認め合い、攻め方や守り方を工夫してゲームを楽しむ。

○授業の様子

ねらい1子どもたちはすぐにゲームをしたそうだったが、初めて扱うボールということもあり、まずボールに慣れるために練習した。ラグビーではボールを後ろへ投げるといふこともあり、円で外向きになり横の友だちにパスをする練習をした。またタグを取られまいと逃げ回るのではなく「陣地取り」という意識を付けさせるため、ボールを持って1対1で勝負させるということもした。しかしゲームが始まるとタグを取られまいと、後ろにジリジリと下がってしまう場面が多く見られたので、その都度「陣取りだから前へ突っ込もう」と伝えた。ルールを理解している子どもは、ボールを持っている子の後ろに素早く下がってパスをもらうことができている。運動に対して苦手な子は「タグやトライができたので、次もがんばりたい」「もっとルールに慣れたい」という感想であった。

ゲームに慣れるにつれ、運動に対して苦手な子(A)も前へ走ることができているが、ボールを持っている子(B)の前にいることがある(図3)。これだとタグされた後にパスをもらえないので、「ボールを持っている子の後ろについていく」ということを強調して伝えた。



図3 ゲームの様子

また、チームの時間に前の子の後ろをついて行きパスをもらう練習をしているチームもあったので紹介した。しかしタグの回数を決めたこともあってか、ゲーム中はパスを回すことが多いチームもあり、どんどん後ろに下がっていつてしまうこともあった。「タグを取られてもいいからボールを持ったら前に走る」ということを常に伝えた。反対に、両サイドを上手く使って攻めていたり、リーダーが「最後の砦」となって指示を出して守っていたりと、チームとして機能してきているところも出てきた。ホワイトボードの作戦ボードは初めてなのだが、前で使って説明すると「先生、それ貸してほしい。使ってみよう」という子どもがおり、そのチームが使う様子を見て、そこから全体に広がった。

ねらい2多くのチームで、「ボールを持っている人しか前に走らない」ということがまだ目立った。せっかく前まで突っ込んで行ったけれど、その後のプレーにつながらないということがもったいなかった。これに対しては、その都度声をかけ、前へ前へという意識をもたせようとしたが、その時だけになってしまっていた。そこで理解しにくいチームには映像を見せ、気付かせるようにした。運動が苦手な子も、ずいぶんタグを取ったり、トライしたりする姿が増えた。個人カードの「ステキだった友だち」にも、「〇〇さんがタグを一生懸命取っていた」「〇〇くんがトライを決めた」等、周りの友だちが書いているところからも、仲間とともに喜びを感じていることがわかった。また「作戦が上手くいった」

「パスを走りながらもらった」等、チームとしての楽しさを感じている子どもが多かった。



図4 ホワイトボードを使ったチームの時間の様子

下記の授業記録はホワイトボードを使った話し合いの場面である。(4/7時)

C1	パス渡す時に、相手に、誰がボール持っているかわかんようにするんは？
C2	それいいな。
C1	走って行くと見せかけて、クロスする時にさっと渡したらいいんよ。

C2 まずC1とC2で試してみよう。
 ゲームで試す
 T さっきの作戦、上手くいった？
 C1 ボール受けるん失敗したときもあったけど、1回成功したで。
 C3 相手、だまされたんやで！
 C2 次は、3人でできるかな。

と、うれしそうに話していた。そして、ホワイトボードのコマを動かしながら、3人での配置（走り方）を考えていた。このチームは最終的に、5人中4人でクロス作戦を成功させることができた。めあての“みんなでクロス作戦を成功させる”まで、あと一歩であった。



図5 タグラグビーのMSPの掲示

Aくんのフェイントが上手かった。
Bくんが積極的にタグを取りにいっていたし、トライもたくさんしていた。チームにたくさん声もかけてくれた。
Cくんが、タグをよけるスピードがとてもはやかったし、すばやくステップでよけていた。
Dさんがパスを受けるとき、下がって受けていたのすごいと思いました。
Eさんが、タグをいっぱいとっていました。（ボール運動に苦手意識をもっていた5人の内の1人）
Fさんが、トライを2回もしていたので、すごいと思いました。（苦手意識をもっていた内の1人）

表4：タグラグビーのMSPの内容

4. 授業の考察

4. 1. 「ソフトバレーボール」の考察

子どもにこうなってほしいという“子どもの目標像”をもつことについて、見通しが甘かったと感じた。“みんなでつなごう”と言ってもそれは私の思いだけで、そのための手立てが少なかった。“どんなバレーボールを味わわせたいか”と技能面での見通しをもっておくべきだった。

お互いのチームでかかわり、切磋琢磨できるよう他チームからのアドバイスがもらえるような工夫をしてもよかった。技能面での向上を目指すためにも、学習カードからのみとりをもっと正確に行う必要があった。

4. 2. 「タグラグビー」の考察

ソフトバレーボールの学習から、“みんなで”という

意識をもって取り組む子が多かった。また、子どもの技能の高まりに応じてルールを変えていけるように単元を見通して考えられたことは良かったと思う。ルールを早く理解できた子は、チームの仲間に指示を出したり、作戦を考えたりできた。しかし、得意な子ほどボールを持つと前へと進んでいくので、ゲーム中での苦手な子（後ろにいる子）への声かけは難しかった。これについては、ビデオに撮ってどのように動けばいいのかということチームで考えさせた。このことにより前へ前へという意識が付き、ボール運動が苦手だと言っていた5人の子どもも、「パスをうまく受けることができた」「トライを決めることができた」と技能面での向上が見られた。

しかしねらいとしていた作戦を立てることに关しては、立てるだけになってしまったチームもある。初発の単元であったのでねらい1の時間数を増やし、もっとルールや動き方に慣れるよう、早い段階でビデオを上手く活用できれば良かった。自分たちの動きを客観的に見て分析することをしっかりと行うことで、得意な子も苦手な子もチームを意識した動きや練習をして、ゲームに活かすことができたのではないかと考える。

5. 成果と課題

事前にアンケートをとることから、一人一人の思いを知り、ルールや用具・場の設定をすることを中心に学習計画をたてることで「今もっている力」で楽しむことができた。また、子どもたちはMSPを見つけることを通して、かかわり合いを深めることができた。互いに認め合うことで運動の苦手な子も“ここまでできるようになった”と技能面での向上も感じられていた。しかし、子ども一人一人が仲間と共に、夢中になって運動を楽しむことができたかということ、十分でない部分もあった。それは、プレーや話し合いの場面で運動に対しての苦手意識が先行し、受身的になる子どもがいたことである。3つの対話をしっかりさせるためにも、個人カードや体育作文などで工夫したいことなどをもっと自由に考え、活動に活かすことができればよかった。そうすることで、さらに自分たちに合った体育科学習が展開できたのではないかと考えられる。また、自分たちで課題を明らかにできれば、動きや作戦につながると考える。そのためには、自分たちのチームの特長をもっと知らなければならぬ。今後、ゲーム中の動きを分析するためにはビデオだけでなく、自分たちで記録を効果的にとることも考えていきたい。

参考文献

- 佐伯年詩雄(2007)『『楽しい体育』の豊かな可能性を拓く』全国体育学習研究会編
 和歌山市小学校体育研究会研究同人(2009)(2011)
 「子どもが輝くとき」和歌山市小学校体育研究会
 小学校学習指導要領 体育編